

下松市・記者発表（配布）資料

令和6年9月20日

部 課 名	課 長	担 当	連 絡 先 (直 通)
教育委員会 生涯学習振興課	戸高 孝文	林 弘幸	0833-45-1870
1. 件 名	県内2例目盾形埴輪の事前公開（報道機関向け）について		
2. 日時・場所	日 時：令和6年9月30日（月）11:00～12:00（予定） 場 所：下松市役所 5階 502会議室		
3. 内 容	○天王森古墳から出土した形象埴輪のうち盾形埴輪（県内2例目）を2体復元しました。 ○上記2点の埴輪は10月30日から下松タウンセンター「キラル」で開催されるイベントにて展示されます。 ○イベントでの展示に先立ち、盾形埴輪について報道機関向けの事前公開を行います（イベント全体の事前公開ではありません）。 ○当日は、花園大学文学部教授の高橋克壽氏による解説を行います。		
4. 出土埴輪について	今回復元した盾形埴輪について 別紙のとおり（解説文）		

天王森古墳の盾形埴輪

天王森古墳の盾形埴輪は2点あり、これまで復元されてきた大刀形や巫女形や家形の各種形象埴輪同様残存状態が非常によく、基底部から頂部までほぼ全形に復元することができた（大きい個体：高さ105 cm、幅48 cm、台部径26 cm、小さい個体：高さ99 cm、幅43 cm、台部径25 cm）。

いずれも円筒の胴体に板状の粘土をヒレ状に貼ることで中央がやや張り出す形の盾を表現した埴輪である。2個体とも盾の頂辺が山形となり、左右の角が少し尖った形に作られている。その表面には、二条一組の線刻によって、内区と外区に分けられ、外区には外に向けた連続する三角文が共通して描かれている。そして、内区には水平線が平行に描かれているが、それらの大きさには差異が認められる。工人が異なることを示している。

上記の特徴はこの時期広く普遍的に認められるものであるが、盾を模した部分を載せる円筒形の基部との接合には、倒立技法と呼ばれる畿内で6世紀前半に一律に採用された技法が用いられている。

古墳時代前期後半以後、他の武器武具の器財埴輪とともに「辟邪」の機能が観念的に期待され、形象埴輪の主要器種として、その場を荘厳するようになった。中には直弧文を表現したものもある。

なお、モデルとなった実物の盾は漆塗りの革製品であり、背丈ほどの大きさの置き盾と呼ばれるものである。この盾自身もまた、4世紀末以来、被葬者の遺体を収めた木棺や粘土槨を覆うように「辟邪」の意味を込めて収めることが5世紀にさかんになる。

天王森古墳の今回復元された2点は、大刀形埴輪同様、大阪府高槻市の真の継体天皇陵である今城塚古墳から出土した盾形埴輪と文様や作り方において非常に共通性が高い。このことから、天王森古墳の大刀形埴輪および盾形埴輪を製作した工人（集団）は、継体天皇の元で埴輪作りに従事した工人あるいは、そのような人物から埴輪作りを学んだ工人と考えられる。

なお、盾形埴輪は、県内2例目であり、他に萩市大井地区に所在する円光寺埴輪窯跡から破片が出土したことが知られているだけである。

